

Title	ハンス・ヨナスにおける倫理思想の体系について 一形而上学の概念を手がかりに一
Author(s)	戸谷, 洋志
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/72422">https://hdl.handle.net/11094/72422</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

氏 名 ( 戸 谷 洋 志 )	
論文題名	ハンス・ヨナスにおける倫理思想の体系について—形而上学の概念を手がかりに—
論文内容の要旨	
<p>本稿の主題は、ドイツ出身のユダヤ人哲学者であるハンス・ヨナス(Hans Jonas 1903-1993)の倫理思想の体系を解明することである。ヨナスは著書『責任という原理：科学技術文明における倫理学の試み』(1979年 以下、『責任という原理』)において、科学技術文明の潜在的な危険性を指摘し、これに対して現在世代が担うべき未来世代への責任の基礎づけを試みた。しかし、その理論は必ずしも体系的に論じられているわけではない。これに対して、同書に前後するヨナスの諸文献を横断的に検討し、ヨナスの倫理思想の全体像を明らかにすることが、本稿の目的である。</p> <p>先行研究に対して本稿がもつ独自性は、ヨナスの形而上学の概念を重視する、という点にある。同概念は、ヨナスの倫理思想において少なくとも三つの局面で前景化する。第一に、科学技術文明の根底にある存在論としての形而上学であり、第二に、それに対する克服としてヨナスが提示する責任原理が立脚する形而上学であり、そして第三に、哲学的生命論において要請される包括的な自然像としての神話の形而上学である。先行研究において、これらは個別には主題化されているものの、これらにおいて通底する形而上学概念一般の分析は明らかにされていない。しかし、そうした形而上学概念一般の意味を明らかにしない限り、個別の局面におけるヨナスの形而上学をめぐる分析を相互に連関させて有機的に理解することはできない。それだけでなく、ヨナスの倫理思想は、そうした形而上学概念一般の意味の理解を通じて、初めて有意味に解釈することが可能になる論点を含んでいる。これが本稿の基本的な立場である。</p> <p>ヨナスにおいて、形而上学概念一般の意味は、人間が形而上学をどのようにして構想できるのか、という人間の能力の視点から論じられる。そのため、その議論はヨナスの倫理思想全体のうち、哲学的人間学の部門に属することになる。ヨナスの文献における現れ方に従う限り、哲学的人間学は哲学的生命論の各論の一部として位置付けられる。哲学的生命論は、古代グノーシス思想の研究に続くヨナスの思想の歩みの第二段階に位置付けられ、第三段階である責任原理を準備する思想として解釈されている。もっとも、哲学的生命論は現代の形而上学の批判的な克服を企図するものである。そうである以上、哲学的人間学は哲学的生命論そのものに論理的に先行していなければならない。こうした観点から、本稿は、ヨナス自身がそうしていたよりも、ヨナスの哲学的人間学を重視し、ヨナスの倫理思想のもっとも根本的な理論的基盤として解釈する。</p> <p>第一部では、ヨナスの形而上学の概念に対する基礎的な分析を行うために、哲学的人間学を中心に検討した。哲学的人間学は、他の生物種に対して人間だけがもつ独自の自由のあり方を主題化するものであり、ヨナスはそれを想像力のうちに見定める。そして、想像力の派生体として反省能力が抽出され、ここから形而上学の概念が導き出される。想像力が常にある対象を様々な仕方で表象することができるように、形而上学にもまた様々なあり方が可能であり、言い換えるなら形而上学には多様性が認められる。そうした多様性は、形而上学が変化していく可能性を開くものであり、ヨナスはここに形而上学の本質的な歴史性を洞察する。こうした基礎的分析に基づいて、西洋の形而上学の歴史を眺める時、そこには太古の生命論的一元論、古代から近代にいたる二元論、近代から現代を規定する唯物論的一元論が段階的に示される。ヨナスはこの唯物論的一元論を「死の存在論」と呼称し、そこにおいて生命は死んだ物質へと還元され、また科学と技術の不可欠な連関により、科学技術文明が立ち現れる、と指摘される。そして、そうした科学技術文明における危機として未来世代に対する脅威が立ち上がり、これに対して死の存在論が何らの解決策ももたないと述べられる。しかし、死の存在論が一つの形而上学である以上、それとは異なる別の形而上学を構想することもまた可能であるはずだ。こうした仕方で、科学技術文明によってもたらされる現代社会の危機が形而上学の問題へと還元され、これに対して新しい別の形而上学の構想することが、ヨナスの倫理思想の戦略になる。この意味において、ヨナスの哲学的人間学はその倫理思想全体に理論的な出発点を確保させ</p>	

る機能を担っている。

第二部では、死の存在論が喚起するいくつかの問題を克服するための足掛かりとして、哲学的生命論を主題化した。死の存在論において、生命は死んだ物質へと還元されるが、それは同時に精神の自由が否定されることを意味する。これに対してヨナスは、人間が有機体であることを前提としながら、精神の自由を確保するために、有機体のうちに自由を基礎づけるという仕方、生命の存在論的解釈を試みる。それに拠れば、生命の自由の基礎をなしているのは有機体の代謝であり、代謝において生命は自らの身体を構成する質料から自由である。その自由は、生命の世界性と時間性を開き、自己の存在を中心とする目的保持性を可能にする。一方で、代謝の停止は死を意味し、生命はそうした可死性に常に脅かされている。そうである以上生命の自由は、質料からの自由であると同時に、質料を必要とするものでもある。ヨナスはそうした自由のあり方を「窮乏する自由」と表現する。ヨナスはこの自由のうちに生命の実存を洞察し、それが生物種の進化に応じて段階的に増大していくと解釈する。ただし、そうした進化論的な解釈は、その起源を辿るうちに、不可避に非生命から生命が誕生した瞬間を説明する必要性へと直面する。これに対してヨナスは、その瞬間が証明不可能であるとしながらも、神話という推測的な仕方、神による世界の創造の地点にまで遡った説明を試みている。そこでは、創造の瞬間に自らの力をすべて放棄し、以降の世界の歴史に干渉することのできなくなった神が描かれ、人間はこの世界において最大の自由と危険性を担うものとして、神の像を守る責任を担わなければならない、と述べられる。こうした壮大な射程をもつ哲学的生命論は、死の存在論を相対化するだけでなく、科学技術文明において要請される未来への責任を基礎づけるために、理論的な前提を提供することになる。

第三部では、以上の成果を前提にしなが、ヨナスの責任原理を主題化し、その理論的な構造を分析した。責任原理は、責任の対象と責任の主体を概念的に区分し、前者を生命一般、後者を人間として規定した上で、責任が可能であることへの責任として、人類の存続への責任を基礎づける。ここから未来世代への責任が導き出されるのである。ヨナスはこの一連の基礎づけを形而上学的演繹と呼び、特に、生命がそれ自体で善であることを形而上学的公理として示す。一方で、人間の責任能力は人間の自由由来しており、それは反省能力と軌を同じくしている。未来への責任が、責任が可能であることへの責任である以上、その責任は同時に人間が自由であることへの責任であり、したがって、人間の反省能力が失われないことへの責任に他ならない。反省能力が形而上学を可能にするものである以上、その責任は人間が新しい形而上学に対して開かれ続けることへの責任を意味する。本稿は、こうした仕方、ヨナスの責任原理と哲学的人間学および哲学的生命論との理論的な連関を明らかにし、また、そうした連関を前提にしない限り『責任という原理』の十全な解釈が不可能であると指摘した。

以上の分析によって本稿は、形而上学の概念を鍵概念にしなが、ヨナスの倫理思想の体系を論じた。それによって、『責任という原理』における不明瞭な理論構造に見通しを与え、他の思想群との関係を明らかにした。ただし、責任原理がそれ自身死の存在論に抵抗する形而上学でありながら、その倫理的な要請が新しい形而上学へと開かれていることへの責任である以上、責任原理はそれ自身をも相対化させることになる。実際に、ヨナスは後世の人々が自らの責任原理を乗り越えた新しい形而上学を構想することへの期待を揮らない。この点において、ヨナスの倫理思想の基底を一貫して支えているものが、形而上学の無限の多様性への信頼であることを、本稿は結論として述べた。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 戸 谷 洋 志 )				
	(職)			氏 名
論文審査担当者	主 査	大阪大学	教授	須藤訓任
	副 査	大阪大学	教授	望月太郎
	副 査	大阪大学	教授	舟場保之
	副査	大阪大学	特任講師	嘉目道人
論文審査の結果の要旨				
以下、本文別紙				



論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： ハンス・ヨナスにおける倫理思想の体系について 形而上学の概念を手がかりに

学位申請者 戸谷洋志

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	須藤訓任
副査	大阪大学教授	望月太郎
副査	大阪大学教授	舟場保之
副査	大阪大学特任講師	嘉目道人

【論文内容の要旨】

本論文は、ドイツ生まれのユダヤ人思想家ハンス・ヨナス（1903－1993）の倫理思想の体系を、形而上学概念を軸として解明しようとするものである。その際、倫理思想が本格的に展開される以前にヨナスが取り組んでいた生命思想との関連付けを求め、もってその倫理思想の内実をより鮮明ならしめることを目的としている。本論文は3部構成をなし、序論の後、「形而上学概念と現代の諸問題」を論ずる第一部、続いて「哲学的生命論」をテーマとする第二部、そして「責任原理」を分析する第三部から成り立っている。全体の分量はA4判135ページ（含文献表5ページ）で、400字詰原稿用紙換算ではおよそ500枚弱となる。

ヨナスはなによりその著『責任という原理』（1979）において科学技術文明がその発展の果てに取り返しつかない環境破壊を引き起こし、未来世代に重大な問題を突き付けかねない危険性をいち早く指摘し、環境倫理・世代間倫理の課題を立ち上げたことで知られる。しかし未来への責任とは、いまだ存在しない世代への責任倫理である以上、当事者の同レベルでの相互性という伝統的な倫理概念にとって一大前提となっていた事象が認められず、そのため、その倫理の基礎固めは従来の考え方ではなしえない。この思想的問題は哲学的に根本的な反省を迫るものであって、そこに形而上学概念の反省が避けて通れないものとなる。それは一方で、環境破壊の元凶となる科学技術文明そのものの根底に存する形而上学の究明であるとともに、他方で、そうした環境破壊を回避するための新たな形而上学の模索ともならねばならない。ということで、本論文第一部では、ヨナスの形而上学概念が展開されている哲学的人間学が検討の俎上に載せられる。その結果、歴史的に生命論的一元論・物心二元論を辿ってきたあと唯物論的一元論となった形而上学が現代の科学技術文明を根底的に規定しており、それは「死の存在論」と称されるべきものであることが明らかにされる。形而上学は本来、人間の想像力と反省能力——それはつまり、精神の自由ということである——にもとづいて繰り出されてきたはずなのに、いまやそれはそれらの力をも物質に還元し、新たな形而上学の生成を阻止してしまうような、自滅的なものと化し、それが環境破壊、ひいては生命の破壊につながるようになったとされる。

そこで第二部では、ヨナスの生命論が取り上げられて、生命の本質がなにより、物質の絶えざる入れ代わりの一定の形態としての代謝と生命それ自身の維持という目的保持性とに求められることになる。こうした生命の本質は決して物質に還元されえないにもかかわらず、唯物論的一元論としての死の存在論は生命も精神も、したが

って自由をも物質に還元してしまう。ヨナスによれば、人間とその他の生命体は地続きなのであって、その限り、自由は人間の占有ではなく、どれほどプリミティブであろうと、あらゆる生命体に潜在する特質である。それだけに逆に、死せる物質からいかにして生命が誕生したのかの説明が重大かつ困難な課題として突きつけられる。この課題に対してヨナスはあえて神話を持ち出し、神による宇宙創成と宇宙創成による神の無力化というアイデアを提示する。ここには形而上学的課題に対処しようとするヨナスの一つの思想的態度が窺えるといつてよい。第三部では、以上の形而上学概念の究明と生命の本質の探究を承けて、責任原理という形で展開されたヨナスの倫理思想の体系が論究される。まず責任の対象と主体とがそれぞれ生命であり人間であるとして特定されるが、それは生命がそれ自体として価値があるものであり、その価値あるものを存在せしめる責任を自覚し果たしうるのは人間だけだからである。ここには価値の存在はその存在の当為を含意するという、ヨナスの特異な思想が顔を覗かせており、この存在と当為の一致の思想こそヨナスの形而上学の核心をなす。それはまた、責任の存続の要請、つまり、責任主体としての人類の継続的生存の要請ともなり、そこに未来世代への責任は基礎づけられることを明らかにして、そのことをもって本論文は結論とする。

#### 【論文審査の結果の要旨】

本論文はヨナスの責任倫理の体系をその生命論と関連付け、その際特に生命論の一部をなす哲学的人間論から析出される形而上学概念に焦点を当てて議論の展開を図ったものとして、ヨナス思想の全体を論究のうちに取り込んでいる。ヨナスの関連著作を広く渉猟し、丁寧に読み込みながら、形而上学・生命論・責任原理を相互に有機的に関連付け、明晰に論述し、ヨナス思想の現代的意義を説得的に論述している。また3部の各部の最終章は先行研究の検討に当てられ、多数の二次文献の論究や再批判が試みられている。以上の点には、執筆者の優れた問題整理能力、プレゼンテーション能力が発揮されている。とはいえ、個々の論点では問題も残された。アーベルなど討議倫理の陣営からのヨナスの批判に対しては、その批判を公共性や民主主義と生産的に結び付ける可能性が見逃され、存在と当為の一致というヨナス形而上学の核心についてもこの一致の成立可能性の論述には不明確なところがある。重要性が指摘されながら、「遺産」や「死」の問題について突っ込んだ論究は見られない。「善」は大々的に論じられながら、「悪」についてはごく簡単に触れられるに終わっている。しかし、これらはある意味では、これからの研鑽によって豊かな思想的実りを結実させうる論点である。執筆者は、ヨナスにおいて未来への責任とはなにより、責任が可能であり続けることへの責任であることを明らかにしたが、そのことによって、この自己言及的とも言える責任の構造がまた、新たな多数の形而上学を可能とすることこそが本来の形而上学の本質であるという形而上学の自己産出的構造とパラレルであることをも示唆している。この点は示唆にとどまっているにせよ、本論文はヨナス思想の全体像を取り上げながら、細部に足をすくわれることなく、思想として重要な問題意識を明快に浮き彫りにすることに成功しており、この点は評価されねばならない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものとして認定する。